THE TAIWAN-BUNGEI

臺灣文藝

（昭和十年二月二十八日第三種郵便物認可
昭和十一年二月二十七日印刷納本
昭和十一年二月二十九日發行毎月一回一日發行）

第三卷・第三號

定價二十錢

3

臺灣文藝聯盟編輯

大東信託株式會社

臺中・臺北・新竹・臺南

臺灣文藝 三月號 目次

創作

麗秋の結婚……垂映…(一)

山の黃昏と彼……王登山…(二)

評論

藝術と哲學……洪耀勳…(一九)

名優ベルグナー……吳天賞…(二四)

詩

無題……カネコ・カズ…(二六)

磨碎可憐的靈魂……石榆…(三一)

亞細亞……本田茂光…(三二)

文聯佳里支部作品集……(三四)

吳史民、郭水潭、曾曉青、青陽哲、葉向榮、吳德修、林精鏐、

冬の詩集……吳坤煌…(四二)

綜合藝術を語るの會……(四五)

楊佐三郎、陳運旺、林錦鴻、葉榮鐘、張星建、陳澄波、郭天留、

陳梅埃、曹秋圃、張維賢、鄧雨賢、許炎亭、陳逸松

「……と云ふ親不孝俺であらう。俺をこれだけに育てゝくれた父なのに、病氣の看護も出來ずに、その上に父の死顏をも見ないで、此處で無意識な日を暮した俺だ。俺は畜生だ！親知らずの馬鹿者だ!!父はさぞかし俺に會ひたかつたであらう？長男だつた此の俺に――。」

父の死の顏面を幻に畫いたのだ。そうして自分で自分をあらん限りの言葉を以つて罵倒するのだつた。出來るだけ泣いては涙を流して悲しんだ。子が父への不孝のおわびであらう。

此の時、或る暗い思ひが彼の頭をかすめた。

「父は血を吐いて死んだのだ。それに今の俺も……。そうなれば俺の病氣は遺傳だ。」

そう思へばこそ！母も弟もがこんな病氣で死らねば良いがな？こうした驚怖の念にからはられた。自然に悲哀が募つて來る。終ひには男泣きに聲を上げて泣いた彼だつた。時――、彼は胸に重いものがのしかゝり息苦しさを感じた。いやなものがノドを傳はつて吐き出した。

「あゝ！俺あ駄目だ！。」

激しく咳をしてそこら一面に血を吐いたのだ。身體が崩れてヒフの色の惡く、手足の先から次第に全身にまたがつて、冷たくなり行く阿順の四肢だつた。眼を開かうとはしたが自由に開けられず、口を開こうとはしたがやはり自由が利けなかつた。かぼそい意識の中から阿順は自分のそうした駄目さを知つてゐた。

「父よ、今に俺も行くよ。だが、自分の本望に向つてこんな山での黃昏の中で、死る事が出來得たのは俺は幸福だ。」

阿順は靜かに息を絞め殺して行くのだつた。何時の間にか、K療養所のそこは眞夜そのものゝ姿である。病人達の太い荒い寢息の他、邊りは物音の一つだもしない。寂漠さした寂漠さだつた。

註　此の一篇をK療養所で、淋しく廿才を一期として逝かれた親友T君の苦づいた墓前に獻ず――。

（一九三五年の舊稿より）

藝術と哲學

（特にその歷史的社會との關係）

洪　耀　勳

はしがき

編輯子の需めに應じて執筆を約束したのであるが、後で考へて見ると「臺灣作家の有つべき哲學」の如き課題は今の私にとつては二重に困難であることを知つた。第一に臺灣萬般の實生活に疏く經驗の淺い上に與へられた日數も少く、その爲め廣く「臺灣文學」とも言ふべき諸作品に一應眼を通し、作家諸賢の御高見に聽き御感想を叩くといふやうな時間を許されなかつたことに由る困難　第二に「臺灣文學」と云ひ「臺灣作家」と名のるからにはその據るべき何等かの臺灣的理論がなければならぬと思ふのであるがミネルヴアの梟の例の如く、理論づけは常に遲れ勝ちであり、況して臺灣文學の意識した活動は比較的に最近のことに屬することであるから無理からぬことではあるが、尙かゝる理論が確立されてゐない有樣で、從つて相互對照すべき立論の容觀的標準のないことに由る困難。かゝる困難をおして「臺灣作家の有つべき哲學」を云爲することは、蓋し無謀の甚しきに非されば獨りよがりな議論でなくて何であらう。決して人には敎へうるものでない哲學の本質に戻いてそれを押賣する結果にならなければ幸である。そこで再三中止しようと考へたのであるが「それでも何か」といふ編輯子の熱心を無にしがたく、また他面單なる私見として私の如き觀方も或は許されるのでなからうかと愚考し勇を鼓して責を塞ぐことに決心した。

一、

臺灣新文學創刊號の「臺灣新文學に所望する」內地一流作家達の意見に徵してこれを綜合し、更にその不明の點を明かにして敢へて論斷を下せば大體次の如くなると思ふ。植民地文學なる名稱に對して、またかゝる文學の成立可能根據につきて文學そのものゝ本質から看て、疑問を懷いてゐるもの若干あつたやうに見受けられたが、文學は眞實を描くべきものであり、現實を全體的觀點より描かねばならぬといふ點に於て、即ち文學の對象は美的內容であるにしても、その內容はどこまでも現實的生活地盤に即した具體的內容でなければならず、それ故に臺灣には臺灣特殊の生活ある以上その傳統的歷史性、社會性及びその歷史的現段階の如きものに由來する臺灣的感情の特殊性を具體的に文學に生かし且實踐することによつてその特殊的使命を果たすと同時に而かもその特殊性は維支されて文學一般へ結付きうるといふ點に於て大體の意見が落付くのではないかと思ふ。

而して特殊性の具體的描寫はその歷史的社會的現段階に基かねばならぬ限り、リアリズムでなければならぬといふ點は、臺灣のみならず現在の國際的な文藝運動の一反映であつて苟くも文學或は藝術と生活との連關を現實的に具體的に把握せんとする限り當然依らねばならぬ最も該切な方法であらう。

かくの如く對象が定まり方法が決まると文學の業は至極簡單の如く思はれるが、同じ對象、同じ方法であつても、創作家の表現態度や視角によつて、また藝術の本質への關係の仕方如何によつて、同調異律はまだしも、異調異律千種萬態の作品が生產されるのである。この事は一面藝術の特性の一つである豐富性を意味すると共に他面藝術家の視角、態度乃至世界觀の相異に由るものといはねばならぬ。同じ律動的生の流れを同じ器によつて汲み取るにしてもかくの如く汲む人の位置や態度、一般に世界觀によつてその內容が著しく變易を受けねばならぬのは何に由るか。それは實に藝術家の個性に由ることまだ大であるといはねばならぬ。殊に藝術の獨創性は直ちにその個性の獨時性を意味するものであつて、個性なき藝術品はたゞ利用價値とか交換價値をいみする商品と何等撰ぶところない。かくの如く個性の尊重されねばならぬといふことからして、藝術家は單なる美のイデーを勝手に想像し、その構想力の思ふまゝに創作してよいといふことにはならぬ。藝術家の存在の仕方が既に示してゐるやうに、即ち世界的內存在としての藝術家は、世界への生存交涉に在るものであつて、その現實的社會生活感情の直接的な感情的表現、その體驗を通しての美的形成作用はどこまでもその特殊的種の基體に根柢を有したものでなければならぬ。美的なるものゝ感情は社會的連帶性の感情から分離されえない。いはば藝術家は社會の感情を己の感情とし、その銳敏なる直觀の力によつて、衝動的に暗く社會を驅り立ててゐるものを感知し、それを捕へ、それを表現せねばならぬ。この點から看て、臺灣文學はあくまで臺灣の現狀に即し、その特殊的歷史性、社會性等の基體に立脚したものでなければならぬことを主張すると同時に、その種的基體を經ずに直ちに文學一般の如き類的普遍の全體に沒入してしまふやうな文學に對して警告したい。それは文學の本質は一般的であるにしても、それが抽象的一般でなく具體的一般たる爲めには或は現實的になる爲めには、かゝる種的基體を充分に顧慮せねばならぬからである。

二、

藝術家の描かんとする對象は美的對象であること、而して美はその他の諸價値と同樣に一つの文化價植である事は先づ異論ないと思ふ。美を形式的に觀た在來の考へに反對し、あくまで美をその內容に即して理解せんとする限り、藝術價値は一つの價値存在であり、爾餘一切の存在と著しき對抗緊張に立つてゐて、またかくすることによつてのみ、その現實的形態をかち得る。即ち存在緊張の存するところは何處でも我々は價値存在存につきて語り得る。價値は價値として捕へ評價する人間の體驗を通してのみ現實的に充實される。即ち體驗者に於てのみ價値は價値自體ではなくして、一つの存存として他の存在との緊張的形態としてあるのである。價値が一つの價値存在として見なければならぬ以上、諸々の構成要素から成立つてゐるところの構成全體としての形態でなければならぬ。而して形態は一方事態そのものであり即ちその構成要素の總和とも見られるが、他方事態そのものゝ總和より以上のものである。それ故美の價値形態は感情的所與の「在り方」として示されねばならぬ。その構成諸要素が感情的直觀によつて、より內的に、より緊密に統一されゝばそれ程その美的

對象はそれ丈けより美しく、より明かである。外から見ても、また體驗から言つても、諸要素の内的統一は調和として示される。しかし調和は表面的な淺薄な意味に解された靜的相互適合を意味してはならぬ。調和は此處では一つの目標の方向に於けるその諸要素の内的動的緊張存在と解されねばならぬ。美はこの意味で一つの價値形態であつて、而かもより高き秩序の形態である。低き秩序の形態は單な事實的形態であるが、美の形態はかゝる事實的形態の總括的統一として夫々の構成要素の「如何に」あるかを指示する。かゝる美の内的動的緊張は諸要素結合の克服力として活動する。構成全體の性格はその諸構成要素、時にはその一要素によつてさへ限定される。同じ風景でもその時その都度の狀況によつて變化極りない性格をもつが如きである。朝、晝、晩に見られるか、晴、曇、雨の天氣に於て見られるか、その一々の場合に見られた性格が全體の性格を限定する。而してこの一々の性格は價値を告知する。そこで人は陰鬱な風景の美しさが、明朗な風景の美しさの如く風景の美を語るが風景そのものはこれ等の何れでもない。陰鬱といふのは、たゞ我々にその表現「として」與へられるにすぎない。同じ一つの風景が時と人より陰鬱になつたり、明朗になつたりするのは、美の現實的構成形態が對象的には、「……として」の性格をとらざるを得ないことを意味するに外ならない。陰鬱とか明朗とかの如き性格は、對象に於ける心的なものとして體驗されることは誤りないが、感情移入説でいふやうに、前以て意識された自己作用を想起してこれをこれに對應する感覺を後から經驗できるやうに對象の中に移入する意味に解してはならぬ。さればとてもこより感情移入作用一般を全然退けるのではない。なんとなれば感情移入作用を、作用との内的統一に於てこれを認めたいからである。對象構造はそれ自らの物的基礎を有してゐて、それが「として」表現されるのである。陰鬱、明朗、崇高、優美等は「として」の性格を帶びて表現されるには、心的物的の融和が既に存してゐるのである。單なる感覺作用がいはば高められて内的に統一されてゐる。事實と志向作用の内的抱合に基いてゐるのである。

美的なものは、第一にその構成諸要素が内面的に結合したものでなければならぬ、少しも曇らされず、純であればある程一層美しい。この意味で「純なる醜」も一つの美であるこれが美の純粹性である。第二に豐富性をもたねばならぬ。純粹性を内含した力の作用的表現でなければならぬ。單なる外在や並存の諸要素が克服されて一つの統一的力の表現を有たねばならぬ。

たゞのこゝからして、美的價値は單なる「……こいふ存在」、現實存在が、純粹性、充實性及び力によつて質的價値存在に作りかへられて、いはゞ「凝集した」現實存在であるこいへる。こゝで注意すべきは「凝集した」こいふ概念は、プラトンのイデーの如く無差別的統一を意味してはならない。かゝるものであるならば現實的なものは、弱き陰影の如きものに過ぎなくなるであらうから。美的なるものは何處までも現實的なもの、昂揚であつて、對象諸要素の支へこしての内的統一力でなければならぬ。

美的なるものは一つの對象構造こして形態をとらねばならぬ。對象に於ける黄がなしなつても黄は依然黄であるやうに美は對象に關係なく美である主張は、對象のイデーに關する主張である。美の價値はかくの如きものでなく「凝集せる現實」こしてその事實的對象構造から離れられない。この意味で美的價値は「リアルな存在當爲」である。美的價値は體驗に於ける或は一つの對象構造をもてる價値存在であつて、即ち實質的直觀に於ける事實的價値こして統一されたものであつて、對象構造の破壞は同時に價値の破壞を結果するから、決して表象された價値でないことは明かである。

三、

對象的構造に於て價値を價値存在こして捕へる考へは形式的價値論を粉粹する。而て價値形態を成立させるところの對象構造は、既に人間が存在してそれを把握し體驗することを意味してゐる。人間に於ける把握作用、評價作用によつて初めて價値は充實される。かくして價値は自體にして且獨立になる。自體の價値は感情の謀介によつてのみ價値存在の特殊作用に入り來る。それ故に價値は「主觀的—客觀的」でなければならぬ。主觀は見はするにしても價値を創りえない。しかし主觀なしには價値はその作用的充實を見出しえない。觀るものが價値的ものを捕へることによつて、價値は充實される。この主觀的充實作用なしには價値は現實的にならない。價値は人間から獨立せる領域を有するかも知れないが、現實的には價値存在こして對象諸要素と内的結合に於て成立つてゐる。イデー、はたゞ理想的なもので、いはば原理の純粹形

式を意味するに外ならぬ。決して事實的にはならぬ理想的、論理的、可能的たるに止まる。イデーの世界は、形成された素材的なもの、有する空間性をもちえない。故にイデーは決して對象性をもつことができない。價値をイデーと見るのは價値を絶對化することに外ならぬ。價値存在は對象構造として實現されたものでなければならぬ。對象構造より前に何も價値は在りえない。從つてこれより前に價値のも生じてはならね。價値の超越的獨立性を排斥する我々は價値の現實を、このの對象構造的價値形態に於てのみ觀んとする。この點から看て、美のイデーはたゞの無にも等しいものであつて全然價値性格をもたない。イデーが何かの價値といはれるのは實は對象構造に既に關係して「として」の性を常びたものである。

そこで、價値を希ひ求め努力する限り、價値は實現されることを要求するのである。價値は「リアルな存在當爲」である。價値は存在に於てのみその在るところのものになる。價値は存在せねばならぬといふことは、價値は構成諸要素間の內的統一として現實的に存在するといふことである。

四、

藝術家の形成作用によつて創造されたものはディルタイによれば、永遠に現實的るもの、本質的なもの、有意味なものである。藝術的なものは、我々の生存交渉に於て見出されたものが、有意味性の領域に於ける固有な價値を有するものに高められたものである。この意味に於て藝術は、「生理解の機關」である。ディルタイによれば、人間の窮究的意義は「生理解」にある。この意味は藝術家は「眞なる人」である。ディルタイは有意味性を生の基本範疇と見做したのであるが、これには直ちに同感しえない。有意味性の前に更に根源的な心靈的なものがなければならぬと思ふ。心靈的文化の如きものは普て存在してゐて、人間と全世界の最も端的な直接的交渉を表現してゐるに違ひない。藝術は本質的なものであるよりも根源的には心靈的であると思ふ。かゝる心靈的なものが全社會に瀰漫してゐて、從つてその表現としての藝術的なものは直ちに全社會人の肺肝より流露したものであつたのである。「藝術に對して、捕はれない態度は社會に根抵を有する意味あるものから出發するにある。藝術的るものを一般的に意義的に見んとする主知主義的文化は藝術の社會的根抵を失ふた

ものである」とウエーバーは警告してゐるが、確かに若々しい元氣に滿ちた文化に於ては、藝術品は社會と密接に關係を保つてゐる。衝動的に暗く社會を驅り立てるものから形成せんとする限り、社會的基體に基いてのみ藝術家は創作せねばならぬ。社會的基體に於ける共通的な意欲、共同的な重要性に於て、汝に於ける我を、また我に於ける汝を捕へることが卽ち社會を認識することである。

更に進化せる時代はなると根源的生の力が分化した爲めに、主知主義的傾向に災ひされて藝術品は社會的基體から分離した。藝術品はより纖細により包括的に、より複合的になつて同時に心靈的な層から離れ、全然日常生活から引きはなされた知的直觀の對象物に化した。

若しも藝術家が、彼の屬する社會を衝動的に驅り立てるものに立脚して創作せんとするならば、長い時代看過されて來たところの藝術のもの社會的一成素としての重要なる機能を再認識せねばならぬ。これによつて、藝術品は形成されたものとして、同時に社會的諸層から獨立的存在である、ことといふことは決して少しも變更を受けない筈である。藝術はその內容から云つても、その表現法(スチル)から看ても、社會的機能としての役目を充分に果たさねばなちぬこと勿論であるがそれと同時に、藝術品は、それがその基體に基いて忠實に構成され、創造されたものであればある程その獨立性を主張しうるものであつて、決して假面をかぶつたもの、迎合的なものであつてはならぬことまた勿論のことでなければならぬ。

最後に藝術のもつ超越根據を述べよう。

五、

先きに私は人間は世界內存在といふたが、人間は有限的である故に、また歷史的社會的存在である故に彼自己自らによつて生存することができない、人間の生存は常に他のものとの生存交涉だあるからである。それ故に人間存在の存在の仕方は世界內存在の構造をもつのである。歷史的社會に於ける具體的生存の交涉に於て人間と世界は出會ふ。卽ち主體としての自覺存在と客體としての世界は生存交涉の二つの契機をなすものであつて、この生存交涉に於て自覺存在が出會ふと

ころのものは皆「……の爲め」、「……として」の性格を帶びるもので、それはその全體との關聯を指示し、またそうすることによつてのみ我々に理解される。それ故に自覺存在には、その生活交涉の必要に基いて存在或は世界を了解してゐるここに、存在の唯一の存在可能根據であつて、哲學がその根源性を自覺するなら常にここに立ち歸らねばならぬところのものである。

存在の自由、超越を意味してはならず、あくまで生活交涉に基いた自中にあり超越でなければならぬ。これが人間」としての自由、超越を意味してはならず、あくまで生活交涉に基いた自中にあり超越でなければならぬ。これが人間

歷史的社會的存在としての人間は決して理念とか精神とかの如き透明な理性的一般者でなく、強き衝動的根本欲を有するバトス的存在の一面を否定せぬ限りそれを嚴肅なる事實として認めなければならぬ。如何なる偉大なる業も熱情なしには成就されなかつたやうに、藝術の創造作用としてのボイエシスの成立にはバトスの強き意欲なしには何ものも創造されぬ。ところがバトスは無限に暗き身體性と物質性の直線的限定、自己肯定の立場であつて、それ故過程的作用的連續性の同質的反復はあつても、これのみにてはほんとの意味の異質的綜合としての創造は生じない。眞の創造の爲めには、この直線的自己肯定を否定する絕對的他者を必要とする。然らば絕對的他者は何であるか。自覺存在の生存交涉に於ける具體的事實をこつて示さう。

個體の個體たる所以はその自己限定、自主獨立性にある。即ち絕對に獨立にして自發的であり、自らの內に內的統一をもつといふことである。しかし個體の絕對に獨立的であることは同時に他の個體に對立することでなければならぬ。私はもつこつに內的統一をもつことに於て汝から絕對に分立し、汝はまた私と絕對に分立することに於て汝のうちに內的統一私のうちに內的統一をもつことである。即ち私は汝に對してのみの私であり得、汝は私に對してのみの汝であり得る。それ故に個體は個體間の相互否定的相互限定のうちにのみ、その個別的連續を斷ち切つて獨立的非連續なる個體となることが出來る。また逆にかゝる個體となることに於て直ちに個體と個體は結合連續する。即ち「非連續の連續」である。絕對的他者のかゝる絕對否定即肯定を通じて、連續的バトスは自己自らに對して距離をもつことができる。バトスが自己に對して距離をもつことは、無限に

深い無形の直線的流動が抑止されて、ノモスの圓環的限定を媒介することによつて一定の形を與へられることである。個體の眞なる內在がその生存交涉に基いて超越をもつことである。自覺存在の世界への超越はこの意味に解されなければならぬ。單に自己の中に目的をもつところのボイエシスの消極的契機とも見らるべきプラクシスの肯定的限定面はかくすることによつてボイエシスの積極的契機の否定面に立つことによつて、即ち絕對媒介をへて絕對的對立の統一としてのボイエマが生成される。ボイエマは此の意味に於て「無からの創造」であつて全く新しき價値をもつたものである。一時流行のシエストフの「無からの創造」は尙バトスの極限に於て見られたものであつて、無限に深き深淵の前に立たされた無氣味な戰き、虛無的な不安はあつても否定を通しての積極的創造はない。また絕對的對立の統一を單に兩者の「中間者」とか「共通者」とかの意味を有する對立の統一を意味するものであつてはならぬ。こゝでいふところの無は如何なる意味に於ても有こはならない絕對無こもいふべきものであつて、主體的自己も客體的世界をも越えて而かも包んで私こ世界を成り立たせる「場所的一般者」の辨證法的世界である。(此の箇處は、東亞新報第五十五號拙稿を合せて參照されたい。またこの辨證法的實在の世界に關しては此處ではたゞ無この關係から暗示したに過ぎない。)

藝術家は、その生存交涉に於て現實的な社會生活感情を、その體驗的直觀を通して形成するところにその本來の面目を有するここは勿論であるが、他面自覺存在なる人間こして超越をもつこいふ點からして、生活に交涉しつゝ而かも生の一々の其の場きりのくだらぬものにこだはるここなく、また迎合的でなく深き洞察眼をもて社會を矚り立てる衝動的なものに形を與へてこれを明るみに出さねばならぬ。この意味に於て藝術的天才は、生活に深く喰ひ込むことによつて社會の痛切な要求を滿たして來たのである。天才は實に社會の目にしてまた同時に藝術の目であつたのである。巨匠の手になれる作品が「永遠に現實的」なものたる所以また蓋しこれに由るこいはねばならぬ。

臺灣の特殊的基體に基いた神品、一つに作家の臺灣社會の正しき把握にかゝる。天才待望の聲漸く加はる今日、臺灣作家自重加餐せられんことを。

——(一九三六年二月十五日)——